

男の子の目にはなみだがいっぱいで大男が来るのが見えませんでした。大男はしのび足でその子の後ろにまわり、だき上げると木に乗せてあげました。すると、木にはいっぺんに花がさきみだれ、鳥がやってきて歌を歌いました。小さな男の子は、のばした両うでを大男の首にまわし、だきつきました。他の子どもたちも、大男がもういじわるではないとわかり、走ってもどってきました。子どもたちとともに、春ももどってきました。

「この庭は、もうおまえたちの

ものだよ、かわいい子どもたちよ」と大男は言い、大きなおのを取ると、かべをたたきこわしました。人々が十二時に市場に行くとき、これまでだれも見たこともないほど美しい庭で、大男が子どもたちといっしょに遊んでいるのが見えました。一日じゅう子どもたちは遊び、夕方になるとみんなは大男のところへさようならを言いに来てきました。「あの小さなお友だちはどこにいるんだい」と大男はたずねました。「わしが木に乗せてやった子はどこだい」大男

はあの子が一番好きだったので
す。「知らないよ」と子どもた
ちは答えました。「いなくなっ
ちゃったんだ」「明日、ぜった
いここにくるように言ってくれ
ないか」と大男は言いました。